

られております。それで人によりましては、これ等の美術工藝品の多くが日本人の創造力の所産であると見て、奈良時代は既に模倣の域から脱却して、日本固有の情操技術を發揮したものであると強調する説もありますが、然しこういうふうに強調するのは、かかる説の唱えられた頃に、支那には奈良朝のそれと比較できるような資料が残存していなかつたからだと思われれます。ところが近頃では、中央アジア方面の發掘品の中に、明かに唐代の製作品で奈良朝のそれと比較し得るようなものがかずかず出てきております。例えば、樹下美人の圖にいたしましても、これと全く區別できないような描き方、圖柄のものが出土しております。そうになると、これらの彫刻・繪畫・工藝品などは、當時の日本人の獨特の考えで創作したという説の根據は怪しくなつてまいります。——もちろん、日本人の獨創によるものも若干はあることは疑いませませんが——従つて奈良時代の藝術品として遺存するものの中には、唐から齎されたもの、または來朝した唐の人から教えられて作つたものがやはり多いのであらうと考えられるのであります。

然らば、奈良朝の文化も、飛鳥朝のそれと同様に、なお外國文化の全面的な模倣にすぎないのかと申しますと、それは必ずしもそうとは考えられませぬ。中には國人の獨創性を發揮して、立派な成績を擧げているものも認められます。例えば假名文字の製作の如きであります。この頃までは、普通に書記には漢字・漢文が用いられていましたが、日本の言葉をうつすのに不便でしょうがないので、この假名の發明となつたのであります。このことは五十音圖の作製と共に、わが邦人の頭腦の働きの優秀を證示するにたるものであります。勿論、假名文字のもとづくところは御承知の通りに漢字であります。漢字の如く一々の言葉を一々の文字によつて寫す煩わしい方法から脱却